

考えられる。

P2-33.

Wound bed preparation としてのハチミツの位置づけ

(形成外科学)

○権東 容秀、松村 一、今井龍太郎
小宮 貴子、小野紗耶香、柴田 大
渡辺 克益

今回我々は抗菌性を有するとされる蜂蜜を主に術後感染創に使用し wound bed preparation に非常に有効であったので若干の文献的考察を踏まえて報告する。

【対象】 症例は① 頭部術後感染創、② 背部術後感染創、③ 前胸部熱傷術後感染創、④ 全身熱傷術後感染創、⑤ 両下肢熱傷術後感染創、⑥ 顔面新鮮熱傷の6名(30歳～76歳：男性3名：女性3名)であった。治療期間は24～306日で、創出現から蜂蜜治療開始までの期間は8～55日間(平均28.2日間 1例不明)蜂蜜使用期間は7～57日間(平均20.0日間)であった。蜂蜜開始時の創部培養でMRSA 4例、MRSE 1例、S. aureus 1例であった。

【結果】 ①、②、④、⑤の4例はいずれも難治性の糜爛または潰瘍を呈しており、②、③、⑤では貧血性、浮腫性の不良肉芽を呈し滲出液が多かった。⑥はSDB～DDBで一部壊死を伴った状態であった。すべての症例でハチミツ使用後に滲出の量が減少、不良肉芽であった創は良好な肉芽となった。①は遠方の外来患者であった為、閉鎖まで蜂蜜を使用した。②は縫縮、③、⑤は植皮で創を閉鎖した。④は転院、⑥は通常の軟膏処置に変更となり閉鎖した。

【考察】 蜂蜜はA：高浸透圧により組織から水分を吸収し細菌の増殖を抑える B：蜂蜜自体がhydroxy peroxideを含み殺菌作用を呈す C：PHが酸性であり局所の微小血管を拡張させ肉芽形成に促進的に働く D：体温で暖まると溶けやすく適度な湿润環境を作る等の作用により創治癒に有効であるといわれている。今回の経験でも不良肉芽を良性肉芽にかえ、滲出液をコントロールできた。しかしながらコントロール後の上皮化までは時間がかかった印象があり、転院例以外は他の薬剤に変更もしくは外

科的治療により創を閉鎖した。このことより蜂蜜は感染創に対してのwound bed preparationに有効であると考ええる。

P2-34.

当科における下咽頭癌の臨床統計

(耳鼻咽喉科学)

○近藤 貴仁、伊藤 博之、清水 顕
岡本 伊作、岡田 拓朗、鈴木 衛
(八王子・耳鼻咽喉科・頭頸部外科)

塚原 清彰、吉田 知之

1998年1月から2006年12月の9年間に当科で初期治療を施行した下咽頭癌87例について検討した。性別は男性82例、女性5例であった。年齢は40歳から88歳で、平均値61.8歳、中央値61歳であった。病理は全例で扁平上皮癌であった。追跡期間は2か月から139か月で、平均値は39.2か月、中央値32か月であった。主訴、亜部位、病理学的分化度、TNM分類、病期、同時性重複癌、異時性重複癌、治療法を検討した。全体粗生存率、疾患特異的生存率、病期別疾患特異的生存率、進行癌の治療法別生存率、亜部位別生存率、N別疾患特異的生存率を算定し、検討した。それぞれKaplan-Meier法による生存曲線を作成して評価した。5年粗生存率は37.3%であった。疾患特異的5年生存率は45.4%であった。Stage IVの疾患特異的5年生存率は42.8%であった。進行癌の治療法別疾患特異的5年生存率はRT(±NAC)で38.8%、CCRT(±ND)で55.0%、TPL(±NAC)で40.8%であった。統計学的有意差は認めなかったが($p=0.847$)、CCRT群において生存率が良い傾向がみられた。亜部位別疾患特異的5年生存率はPS型で40.3%、PC型で62.0%、PW型で29.1%であった。統計学的有意差は認めなかったが($p=0.410$)、PW型で生存率が悪い傾向にあった。